

I 研究の概要

I 研究の概要

1. 研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 研究の枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3. 一年次（平成 26 年度）の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
4. 二年次（平成 27 年度）の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

I 研究の概要

1. 研究主題設定の理由

(1) 平成 24 年度までの研究の概要

本校では、平成 20 年度から 24 年度までの 5 年間、ICF（国際生活機能分類）の理念に学びながら実践研究を行ってきた。

その中で、①児童生徒・保護者・教師の三者の思いをもとに目標設定を行い、教育実践につなげること、②学習活動の中で、児童生徒自身による目標設定や振り返りを行うこと、③児童生徒の「行動や言動を含むあらわれ」を丁寧に見取ること、を大切にしてきた。特に、③については、児童生徒の思いや願い等を「内面」と捉え、「内面」を構成する要素の中で「要求」、「既有知識」、「自己認識」、「自己効力感」の 4 つに着目した。（図 I - 1、図 I - 2 参照）

一方で、これまでの 5 年間の研究では、主に個人に焦点を当てて「育ち」を見てきた側面が強く、研究の成果を教育課程に具現化する視点が弱かったことが課題として挙げられる。

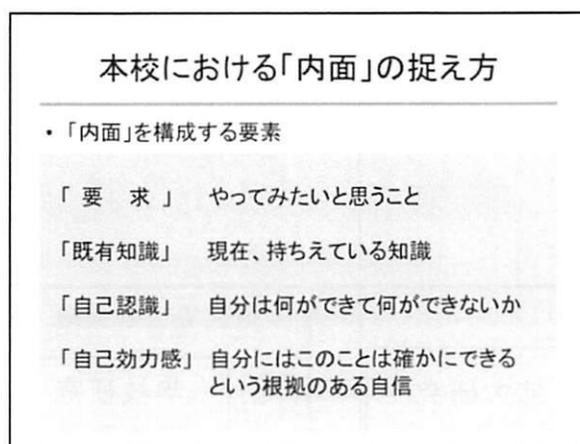


図 I - 1 「内面」を構成する要素

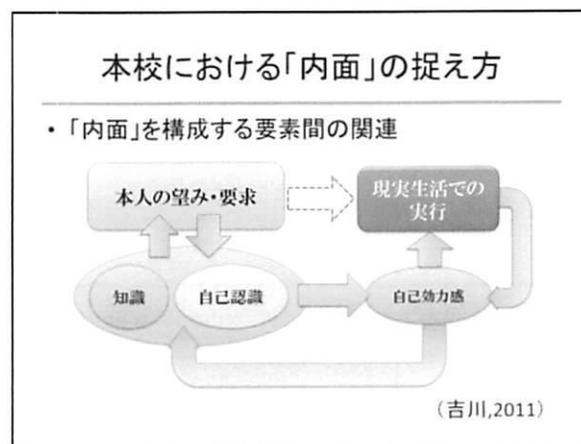


図 I - 2 「内面」を構成する要素間の関連

(2) 現在の研究主題について

そこで、これまでの研究の成果を活かしつつ、課題を解決するために「キャリア教育の視点」を取り入れることにした。なお、「キャリア教育の視点」とは、「(将来の) 社会的・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長や発達を促進しようとする見方を持つこと」⁽¹⁾であるとともに、「キャリア概念に基づき、現在行われている教育活動全体の見直しを図り、改善すること」⁽²⁾である。

以上の経緯から、平成 25 年度は、文部科学省委託事業「特別支援教育に関する実践研究充実事業」を受託し、「キャリア教育の視点からの教育課程を小中高 3 学部の一貫性、系統性、関連性の側面から再考する」の主題で学校研究に取り組んできた。それを踏まえて、平成 26 年度からは、文部科学省委託事業「キャリア教育・就労支援等の充実事業」を受託し、「キャリア発達支援の視点による小中高 12 年間を見通した学習活動の充実改善」の主題で学校研究に取り組んでいる。なお、平成 26 年度からの研究は、3 年計画で取り組んでおり、平成 27 年度は二年次にあたる。

2. 研究の枠組み

本研究主題のもと、次に挙げる目的、内容、体制で研究に取り組んでいる。

(1) 研究目的

- ・児童生徒のキャリア発達を促す教師の支援や授業のあり方を明らかにする。
- ・これまでの学習内容や、その関連性、系統性および学部間の連携、地域との連携等について検討する。

(2) 研究内容

①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践（小学部・中学部・高等部）

児童生徒のキャリア発達を促すための教師の支援や授業のあり方について、各部での実践を通して、検討を行う。

また、キャリア発達支援に関する講演会やワークショップの手法を取り入れた研修等を通して、学習内容の検討も行う。

②作業学習モデルプランの開発（高等部）

校内資源に留まらず、社会との相互作用の中で実践的な作業経験を積むための作業学習のあり方について、実践を通して検討を行う。

③進路指導の充実改善（中学部・高等部）

中学部3年での就業体験や高等部1～3年での産業現場等における実習に焦点を当てて、進路指導の充実改善を行う。

(3) 研究体制

研究体制は、図 I - 3 に示したとおりである。

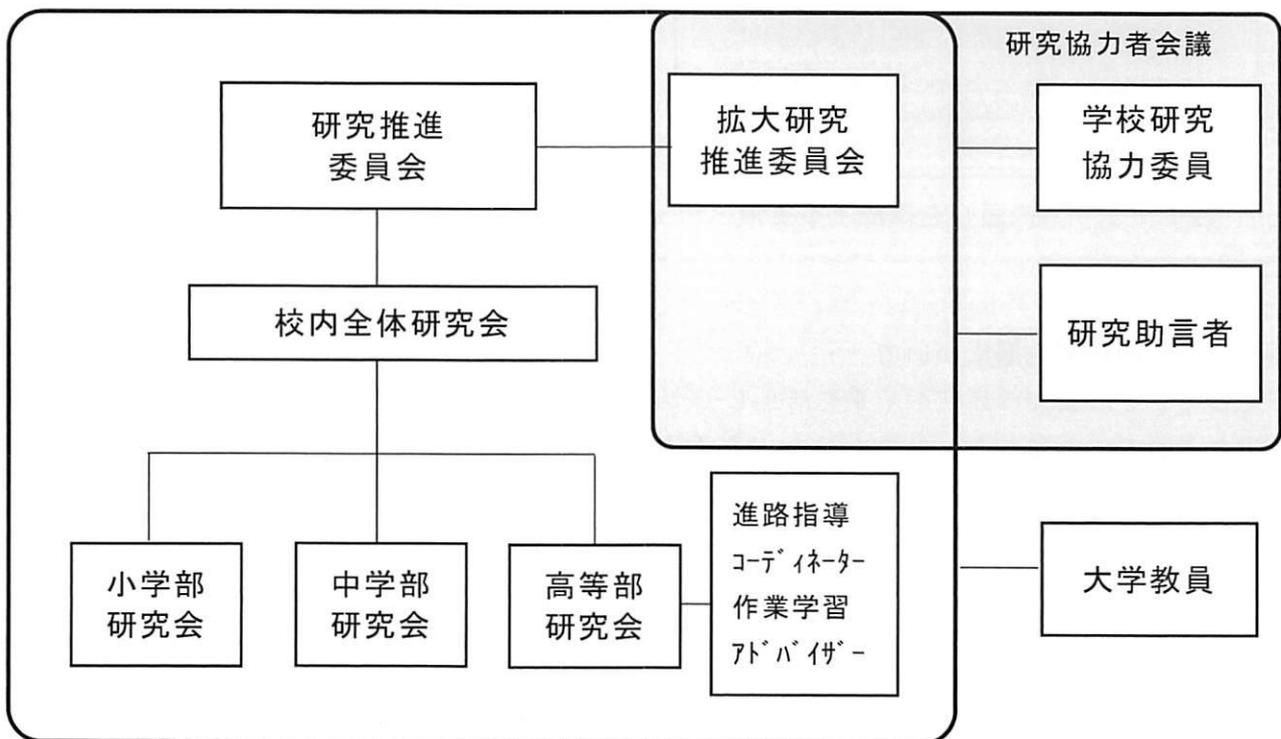


図 I - 3 研究体制

- ・研究推進委員会を設置する。研究推進委員会は、研究主任、研究課担当の部主事と小学部、中学部、高等部の研究推進委員で構成されている。
- ・拡大研究推進委員会を開催する。拡大研究推進委員会は、副校長、教頭、各部主事と研究推進委員会の委員で構成されている。
- ・研究助言者2名を招聘する。研究の進め方等について年数回助言をいただいている。
- ・研究協力者会議を年2回開催する。研究協力者会議の委員は、民間事業者、福祉・労働の関係機関の方々（9名）で構成されている。研究助言者に参加いただくこともある。
- ・高等部に進路指導コーディネーター1名を配置する。
- ・作業学習モデルプランの取組では、作業学習アドバイザーを配置する。



研究協力者会議



進路指導コーディネーター



作業学習アドバイザー

3. 一年次（平成26年度）の研究

（1）実施内容

①児童生徒のキャリア発達を促す授業実践

ア. 本校における「キャリア発達」の捉え

中央教育審議会（2011）は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の答申の中で、キャリア発達の定義を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」としている。また、文部科学省（2011）は、「高等学校キャリア教育の手引き」の中で、キャリア教育を「子ども・若者が、社会の一員としての役割を果たすとともに、それぞれの個性、持ち味を最大限発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる教育」としている。

本校では、児童生徒一人一人のキャリア発達を捉える際に、これらの定義を踏まえつつ、平成20年度から平成24年度に本校で取り組んだ学校研究で得られたことをもとにして、以下のように捉えた。

【本校における「キャリア発達」の捉え】

子どもたちが経験を通して、自分や自分に関係性があるすべての事象に対する知識や認識を、より現実に即して新たにしていくこと。そして、その営みを繰り返しながら、自分らしい生き方を実現していくこと。

木村（2013）は、「キャリアは環境との相互作用の結果、個人の内部、内面において生まれて発達し、変化するという特性を持っている」と述べている。また、「キャリア教育は、生徒に将来の夢を言わせて、それをかなえるための教育や支援をしようとするのではない。なぜその子がそ

ういう夢を持つようになったのか、これまでの経験や学びがその生徒にとってどういう意味をもたらしたのか、どうしてそういう願いを持つように至ったかということ、まず我々がそれを理解する必要がある」「(大人から見て非現実的と思われる生徒の夢を否定せず) 生徒のそのような経験や学びの背景に関心を持って、新しい学びを支援しようとしているところが重要です。我々にとっても生徒のそういう姿にしっかりと向き合える成熟をしていかなければならない」と述べている。

ここで述べられている教育観・指導観は、平成 20 年度から平成 24 年度に本校で取り組んだ学校研究での教育観・指導観と基本的に一致していると捉えている。

本校では、「我々が世の中を見て、何かを見出す時には、自分たちが既に獲得している知識や概念を通して見ることによって意味を見出している」⁽³⁾ という立場に立って、学校研究を進めてきた。そのため、「児童生徒の知識の持ち方は、我々大人にとって共通前提となるような知識の持ち方とは違うのではないか」⁽³⁾ という前提に立っている。そこで、学習活動にあたっては、児童生徒と教師が同じものを見たり体験したりしても、両者の間で違う意味を見出している可能性があるため、「児童生徒の知識や自己認識を探る」とともに、「児童生徒の知識や自己認識が現実に即していないと思われる場合には、より多くの人と共通前提となり得るような、より現実に即した知識や自己認識を持ち得る」⁽³⁾ ようにしている。その際には、児童生徒が自分自身で体験し、自分に即して知識や自己認識を再構成する機会を設定するとともに、「何に気づいて再構成したらよいか」を児童生徒が気づけるように指導・支援している。

平成 25 年度から取り組んでいるキャリア発達支援の視点による学校研究でも、この教育観・指導観に基づいて取り組んでいる。

イ. 授業実践

ア. で述べた教育観・指導観に基づいて、各部で授業実践を行った。以下では、昨年度取り組んだ実践の概要について述べる。

(ア) 小学部低学年の実践

－遊びの指導「シャボン玉遊びをしよう」－

小学部低学年では、「自分の好きなことや得意なことを見つけ、楽しく主体的に活動する児童」の育成を目指して、授業づくりに取り組んできた。低学年の実践は、一人の児童が始めたシャボン玉遊びに、他の児童も関心を持った様子を教師が捉え、遊びの指導での「シャボン玉遊び」として発展させた活動である。

(イ) 小学部高学年の実践

－生活単元学習「お店やさんをしよう」－

小学部高学年では、「自分の役割を知り、その役割を果たそうとする児童」の育成を目指して、授業づくりに取り組んできた。高学年の実践は、下学年の児童や来校者に対して、ゲーム等を提供するお店やさんの活動を発展させながら取り組んだ活動である。

(ウ) 中学部の実践

－生活単元学習「めった汁まつりをしよう」－

中学部では、「仲間と協力して一つの活動に取り組み成し遂げる」姿を目指して、授業づくりに取り組んできた。中学部では、中学部 3 年の生徒が「自分たちが栽培した野菜を使って調理をして、下学年の生徒にふるまいたい」という思いから、郷土食であるめった汁をふるまう「めった

汁まつり」を企画し、中学部全体で取り組んだ活動である。それに呼応して、中学部2年は全員分のおにぎり、中学部1年は全員分のデザートをつくって持ち寄ることになった。

(エ) 高等部の実践 (作業学習モデルプランの開発)

高等部では、「卒業後に自分が希望する生活の実現を目指して切磋琢磨する」姿を目指して、作業学習モデルプランの開発に取り組んできた。詳細については、②で述べる。



小学部低学年の実践
「シャボン玉遊びをしよう」



小学部高学年の実践
「お店やさんをしよう」



中学部の実践
「めった汁まつりをしよう」

② 作業学習モデルプランの開発 (高等部)

ア. 「プラタナスカフェ」の取組 ～大学、大学生協と協働した実践的作業学習～

お客様とのやりとりや商品流通を体験する場として、金沢大学附属図書館医学図書館に「プラタナスカフェ」を平成26年10月に開設した。昨年度の実践では、カフェの開設前から、生徒が「私たちの店」として捉え、「よい店づくり」の意識を持てるように取り組んできた。

イ. クリーン工房の取組 ～社会人と協働する作業学習～

環境整備を行うクリーン工房の生徒が、金沢大学で勤務する技能補佐員（県内の特別支援学校の卒業生）とともに本校で作業活動を行ってきた。校内の窓掃除では、高等部生徒1名と技能補佐員1名とでペアを組んで作業を行うことで、本校の生徒が社会人との技術や仕事に対する姿勢の違いに気づくよう取り組んできた。

③ 進路指導の充実改善

中学部3年での就業体験と高等部1～3年での産業現場等における実習との間につながりを持たせるための方策等について、中高合同研究会を開催して話し合いを行うとともに、各部で実践を行った。また、就労移行支援事業所と連携した「就労アセスメント実習」の試みを行った。



作業学習モデルプラン
「プラタナスカフェ」の取組



作業学習モデルプラン
クリーン工房の取組



進路指導の充実改善
就労アセスメント実習の試み

(2) 成果と課題

①～③で取り上げた各実践をまとめるに当たっては、本校のこれまでの研究を生かして、「何に取り組んだのか」(アウトプット評価)だけでなく、「どのような成果が見られたのか」(アウトカム評価)も一緒にまとめることができた。しかし、本校として、「活動中に見られた児童生徒の『行動や言動を含むあらわれ』をどのような方法で見取るのか」を明確に示すことができなかった。

また、①～③で取り上げた各実践が、小中高 12 年間の学校生活の中でどのようなつながりがあるのかを話し合うことはできなかった。

4. 二年次(平成 27 年度)の研究

(1) 研究計画

平成 27 年度の研究計画は、表 I-1 のとおりである。研究を進めるにあたっては、表 I-2 のように研修を行う。また、本校の研究成果を発表する機会として、平成 27 年 7 月に「研究フォーラム」、平成 28 年 2 月に「教育研究会」を行う。

表 I-1 平成 27 年度の研究計画

月	学校全体		各学部
	会議・研修等	研究会	
4月		・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会 ・全体研究会	
5月		・研究推進委員会	・部研究会
6月		・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会
7月	・研究協力者会議 (研究助言者・学校研究協力委員来校) ・研究フォーラム	・研究推進委員会	・部研究会
8月	・出張報告会	・研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会
9月			・部研究会
10月	・授業公開(学校研究協力委員来校) ・職員研修	・拡大研究推進委員会 ・全体研究会	・部研究会
11月	・保護者研修 ・職員研修	・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会	・部研究会
12月		・研究推進委員会	・部研究会
1月	・授業公開(学校研究協力委員来校)	・研究推進委員会	・部研究会
2月	・教育研究会 (研究助言者・学校研究協力委員来校)	・研究推進委員会 ・拡大研究推進委員会	・部研究会
3月	・研究協力者会議 (学校研究協力委員来校) ・出張報告会	・研究推進委員会 ・全体研究会	

※研究授業は各学部で計画立案し行う。

表 I - 2 平成 27 年度の研修

年月	テーマ	講師
平成 27 年 3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題提供「キャリア発達を促す教育を推進する学校組織であり続けるために」 ・ ワークショップ 	北海道立特別支援教育センター 所長 木村 宣孝 氏
平成 27 年 7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本校の実践に関する助言 ・ 講演「キャリア発達支援における評価のあり方」 	青森県教育庁 学校教育課 特別支援教育推進室 指導主事 菊地 一文 氏
平成 27 年 10 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講演「子ども主体の生活を実現する領域・教科を合わせた指導」 ・ 本校での実践に関する質疑応答 	岩手大学教育学部 教授 岩手大学教育学部附属特別支援学校 校長 名古屋 恒彦 氏
平成 27 年 11 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講演「社会参加に向けて ～育てておきたい子どもの力～」（保護者研修） ・ 講演「明日をつくるかかわりの力～わかるように・できるように（通訳）する～」（教員研修） 	ベル相談室 室長 臨床心理士 角田 みすゞ 氏
平成 28 年 2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ シンポジウム「キャリア発達支援の視点による学習活動の充実改善のあり方」 	京都市教育委員会 指導部 総合育成支援課 専門主事 森脇 勤 氏 北海道立特別支援教育センター 所長 木村 宣孝 氏

※ 7 月の研修は、研究フォーラムの中で行う。2 月の研修は、教育研究会の中で行う。

(2) 研究内容

① 児童生徒のキャリア発達を促す授業実践

二年次である平成 27 年度は、各部での授業実践と並行して、小中高 12 年間を見通して学習活動を充実改善させるための観点についても検討した。

ア. 教育課程の再確認

小中高の学習内容のつながりについて検討するにあたって、まずは本校の教育課程について再確認することにした。本校の教育課程を表 I - 3 のようにまとめると、次のことが特徴として挙げられた。

- ・ 本校では、教科学習において、領域・教科を合わせた指導と教科別の指導の両方の指導形態を行っている。
- ・ 領域・教科を合わせた指導の授業時数が、小学部では総授業時数の約 7 割、中学部・高等部では総授業時数の約 6 割を占めている。
- ・ 小学部においては、遊びの指導の授業時数が小学部 1 年から小学部 3 年で総時数の 1 割を占めているが、小学部 4 年から減っている。生活単元学習の授業時数が小学部 3 年から増えている。
- ・ 中学部においては、生活単元学習の授業時数が総授業時数の 24% を占めている。また、縦割りの学習集団での学習は、総授業時数の 24% を占めている。(本校中学部では、縦割りの学

表 I - 3 本校の教育課程（指導形態ごとに表したもの）

	領域・教科を 合わせた指導	教科別の指導	領域別の指導	総授業時数
小学部1年	632 (74.4%)	170 (20.0%)	48 (5.6%)	850
小学部2年	685 (75.2%)	175 (19.2%)	50 (5.5%)	910
小学部3年	755 (77.0%)	175 (17.9%)	50 (5.1%)	980
小学部4年	685 (69.9%)	245 (25.0%)	50 (5.1%)	980
小学部5・6年	702 (70.4%)	245 (24.6%)	50 (5.0%)	997
中学部	595 (58.6%)	352 (34.7%)	68 (6.7%)	1015
高等部 II 類型	665 (63.3%)	350 (33.3%)	35 (3.3%)	1050
高等部 I 類型	621 (59.1%)	394 (37.5%)	35 (3.3%)	1050

小学部では、
領域・教科を合
わせた指導が総時
数の約7割を占め
ている

中学部・高等部で
は、領域・教科を合
わせた指導が総時
数の約6割を占め
ている

遊びの指導は、小1
から小3で総時数の1
割を占めているが、
小4から減っている。
生活単元学習が小3
から増えている。

	日常生活の 指導	遊びの指導	生活単元学習	作業学習	体づくり
小学部1年	340 (40.0%)	102 (12.0%)	68 (8.0%)		122 (14.4%)
小学部2年	385 (42.3%)	105 (11.5%)	70 (7.7%)		125 (13.7%)
小学部3年	350 (35.7%)	105 (10.7%)	175 (17.9%)		125 (12.8%)
小学部4年	350 (35.7%)	35 (3.6%)	175 (17.9%)		125 (12.8%)
小学部5・6年	350 (35.1%)	35 (3.5%)	192 (19.3%)		125 (12.5%)
中学部	158 (15.0%)		245 (24.1%)	105 (10.3%)	87 (8.6%)
高等部 II 類型	123 (11.7%)		105 (10.0%)	350 (33.3%)	87 (8.3%)
高等部 I 類型	79 (7.5%)		105 (10.0%)	350 (33.3%)	87 (8.3%)

小学部では、日常生活の指
導が総時数の3～4割を占め
ている

中学部では、生活単元学習が総時数の
24%を占めている

高等部では、作業学習が総時数の33%を
占めている

習集団を「グループ」と呼んでおり、生活単元学習と作業学習で行っている。)

- ・高等部においては、作業学習の授業時数が総授業時数の33%を占めている。

これらのことから、本校の教育課程上では、小学部低学年では遊びの指導、小学部中・高学年では生活単元学習、中学部では生活単元学習、高等部では作業学習が中核となる指導形態であることが分かった。

また、本校の学校研究で、近年、領域・教科を合わせた指導での実践が多く行われてきた。

イ. 領域・教科を合わせた指導についての職員研修

これらの現状をふまえ、領域・教科を合わせた指導という指導形態について理解を深めるために、10月20日に職員研修を行った。講師には、名古屋恒彦氏（岩手大学教授）をお招きした。名古屋氏には、領域・教科を合わせた指導の理念や位置付け等について講演していただくとともに、本校の教員が日頃の実践で疑問に思っていること等について答えていただいた。

名古屋氏からは、以下の事柄を教えていただいた。

- ・ライフステージに応じたやりがいと手応えのある生活をしている姿が真に自立している姿と言えるのではないか。
- ・小学部で思いきり遊んできた人は、高等部で思いきり働ける人になっていると感じている。
- ・「いま」の生活を充実させていくことが必要である。

また、別の学習会では、名古屋氏から以下のような話があった。

- ・小学部の生活が中学生になるための準備教育化しないように、小学部らしさが大切にされなければならない。
- ・どの子にもできる状況をつくり、それぞれのライフステージにふさわしい活動に、主体的に取り組める生活づくりを日々積み重ねていくことが重要である。

本校で一年次（平成26年度）に中学部・高等部合同研究会を実施したが、その中で本校の教員から次のような意見が出されていた。

- ・小学部で十分遊んでいた子は、高等部で十分働いている印象を受ける。
- ・小中高で生活単元学習のつながりについて話し合うことも大切であるが、小学部の遊びの指導・生活単元学習、中学部の生活単元学習・作業学習、高等部の作業学習のつながりを考えていくことのほうがより重要で、優先度が高いのではないか。
- ・中学部は高等部の予備校ではない。高等部や卒業後に向けて必要な事柄を学ぶだけでなく、中学部の時期にふさわしい活動をする必要がある。

これらの意見は、日々の教育活動を行う中で感じていることではあるが、研究を進めるうえで抛り所としてよいかは不安であった。しかし、名古屋氏の講演や質疑応答をお聞きしたことで、小中高の学習活動のつながりを考えるための一つの観点として捉えられるようになった。



職員研修の様子

ウ. 小中高での学習内容のつながりについての検討

研究目的の一つである、小中高での学習内容の関連性や系統性、各部の独自性について検討するために、ワークショップの手法を採り入れた職員研修を年3回実施した。

(ア) 第1回ワークショップ（平成27年3月26日）

第1回のワークショップは、本校の研究協力者である木村宣孝氏（北海道立特別支援教育センター所長）とともにいった。

この日の研修内容は、次の3つである。

- ・ 話題提供「キャリア発達を促す教育を推進する学校組織であり続けるために」
- ・ ワークショップⅠ（合意形成の方法論に関する体験研修）
- ・ ワークショップⅡ（学習内容の系統性についての検討）

学習内容の系統性について検討を行う際には、木村氏から以下の観点が提示された。



第1回ワークショップの様子

※国立教育政策研究所発行のパンフレットに書かれているキャッチフレーズ

（「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育推進のために」）

小学校 「自分に気付き、未来を築くキャリア教育」

中学校 「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育」

高等学校 「自分を社会に生かし、自立を目指すキャリア教育」

各部で現在取り組んでいる学習内容の中から、このキャッチフレーズに該当すると思われる学習内容を付箋紙に書いて、ホワイトボードに貼る作業を行った。ホワイトボードに貼ったものは、本校の教員と木村氏で再度見直し、キャッチフレーズに該当しないと思われるものは、ホワイトボードから外した。

その結果、小学部では、領域・教科を合わせた指導と教科別の指導の多くで、キャッチフレーズに該当する学習内容があった。

中学部では、校外の施設や公共交通機関を利用した学習や作業学習でキャッチフレーズに該当する学習内容があった。

高等部では、作業学習や進路学習では、キャッチフレーズに該当する学習内容がいくつもあったが、国語科や数学科などでは該当する学習内容が見当たらなかった。

第1回のワークショップを通して、会議（打ち合わせ）でファシリテーター役になる際の役割について体験を通して学ぶことができた。また、小中高の学習内容を検討するための視点を獲得することができた。

この後に予定していた小中高縦割りでのグループワークは、時間の都合で実施できず、第2回で行うことになった。

表Ⅰ-4 高等部の学習内容（キャッチフレーズに該当するもの）

領域・教科等	キャッチフレーズに該当する内容				
作業学習	プラタナスカフェ	クッキー製造	パッキング材づくり (雑貨店に納入)	近隣の施設へのプラ ンターの設置	カレンダーの袋詰め 作業
生活単元学習	社会人セミナー				
国語					
数学					
職業	TPO	現場実習について	働くということにつ いて考える	求人票の見方 履歴書の書き方	
家庭	おもてなし	手紙の書き方			
体育	命の大切さ	自分のからだを守る			
総合的な学習 の時間	公共交通機関の利 用	外出時のマナー			

(イ) 第2回ワークショップ (平成27年5月12日)

第2回のワークショップは、本校の教員のみで行った。

第2回のワークショップでは、第1回のワークショップを通して出された学習内容が小中高でどのように関連しているかを縦割りの3つのグループに分かれて検討した。

各グループでは、第1回のワークショップの成果物の中から、小中高で関連のある学習内容を集めて、それらに「調理」「買い物」「校外学習」「人との関わり」「物事に取り組む」「働く」等のキーワードをつけた(表I-5参照)。

第2回のワークショップを通して、一つ一つの題材や活動の小中高それぞれの時期での意味づけを整理することができた。また、キーワードをつけることによって、小中高の系統性の大きな視点を得ることができた。

一方で、一つのキーワードに絞って、話し合いを深めたらよいのではないか、という意見があり、第3回のワークショップでは、今回出されたキーワードの中から、各グループで一つに絞って話し合いを深めることとした。



第2回ワークショップの様子

表I-5 小学部・中学部・高等部で関連のある学習内容 (各部のキャッチフレーズに関連した学習内容)

キャッチフレーズ	調理	買い物	校外学習	物事に取り組む	働く
小学部 自分に気づく	【生活単元学習】 ・自分の食べたいものをつくる	【生活単元学習】 ・自分の好きなものを買う	「うきうきデー」【特別活動】 【生活単元学習】 ・好きなものを選ぶ(昼食のメニュー、行き先) ・公共の施設、乗り物を利用する経験をする	シャボン玉遊び 【遊びの指導】 ・自分の好きな遊びを見つけ、遊びきる ・友達との関わり ・工夫して遊ぶ	おみせやさんしよう 【生活単元学習】 ・自分の役割 ・楽しい経験、成功体験
中学部 自分と社会をつなぐ	【生活単元学習】 ・誰かのためにつくる	【生活単元学習】 ・何かをするために必要なものを買う	「わくわくデー」【特別活動】 【生活単元学習】 ・企画をする(行き先、内容) ・生徒同士で話し合う ・公共の施設、乗り物の利用・マナー	「わくわくデー」【特別活動】 校外学習 バザーでの販売【作業学習】	【生活単元学習】【作業学習】 ・身近な人のために、誰かの役に立てる
高等部 自分を社会に生かす (社会貢献)	【作業学習】 ・販売するためにつくる	【作業学習】 ・作業製品の材料を買う	「ほんもの学習」 【総合的な学習の時間】 ・消費者を育てる視点 ・企画をする(予算、内容、乗り物の時間、地図等)	【趣味学習(学校設定教科)】 「ほんもの学習」【総合的な学習の時間】 ・余暇活用のための社会資源の活用 委託作業【作業学習】	【作業学習】 ・流通の中で、学校の中で完結しない ・自分の立場を意識する

(ウ) 第3回ワークショップ (平成27年7月7日)

第3回のワークショップも本校の教員のみで行った。

第3回のワークショップでは、縦割りの4つのグループに分かれて、第2回のワークショップでつけられたキーワードのうち、一つを取り上げて、小中高の学習内容のつながりについて話し合った。

話し合いを通して、各部で取り組んでいる学習内容の目的や意味を再確認したり、今後改善すべき点について挙げたりすることができた(表I-6参照)。



第3回ワークショップの様子

表 I - 6 校外学習について話し合われたこと

	学部	名称と回数	行き先と交通機関	事前学習	校外学習当日	事後学習	大切にしていること
楽しむ！ ↓ 楽しむ力	小学部	うきうきデー (学級) 年3回 (6月、10月、 3月)	【平成27年6月】 1組 ふれあい昆虫館 昼食: ココス (スクールバス) 2組 うみっくらんど 昼食: ココス (スクールバス) 3組 北陸製菓 昼食: サイゼリア (スクールバス、 電車、路線バス)	1組(1時間) ・教員が行き先を決める ・事前学習で伝える ・昼食のメニューを保護者に聞く 2組(1時間) ・教員が行き先を決める ・事前学習で伝える ・昼食のメニューを保護者に聞く 3組(3時間) ・教員が行き先を決める ・昼食のメニューは児童が選ぶ ・せんべい焼き体験の目標を決める ・せんべい焼きの練習をする	・教員が主導して進める ・昼食のメニューは、 児童が決める ・新しい体験 ・せんべい焼き 楽しかった/怖かった ・電車の支払い	1, 2組 ・写真で振り返る (記憶に残しやすい) 3組 ・写真で振り返る ・楽しかったことを 文に表す ・発表する	・楽しい体験、成功体験をする ・部分的に自分でお金を支払う 一評価していく ・子どもたちが「やってみようかな」と 思える行事、活動にする
	中学部	わくわくデー (学級) 年2回 (6月、3月)	【平成27年6月】 1年 いしかわ動物園 昼食: 園内レストラン (スクールバス) 2年 富山科学博物館 昼食: 駅弁(電車内で) (高速バス、電車) 3年 なし *同じ場所に行きたがる	生活単元学習で 1年(5時間) ・生徒が行き先を選択する (教員が選択技を用意する) ・したいこと、調べたいことを話し 合う (グループ毎に) (これまでの経験を生かして) 2年 ・生徒から「電車に乗りたい」 ・昼食: 駅弁・生徒のこれまでの経験 から?	1年 ・グループに分かれて活動 する ・生徒同士で相談しながら 進める ・昼食の注文、支払いも 生徒が行う ・時計、放送等をもとに行 動していた ・慣れた環境では、自分た ちで行動する→自信に つながる	・生徒が撮影した写真を 見ながら、調べたことを 書く(クイズ形式など) ・1番心に残ったことを 書く ・新聞にまとめる (これまで何度も経験 している)	・目的を伝える 「わくわくする活動だよ」 何がしたいか考えてもら う ・調べたいことを 調べ ・決めた、生活単元学習でも活動する 一修学旅行につながる ・子どもたちだけで行動する →達成感につながる ・相談して妥協する、合意点を見つける
	高等部	自分を 社会に生かす 自分たちで遊びに 行けるように 通費者として	ほんもの学習 (グループ) 年2回 (7月、2月)	【平成27年7月】 ○図書館コース (泉野図書館) 昼食: ココス (路線バス) ○内灘コース(海岸を教策) 昼食: フードコート (路線バス、電車) ○ラウンドワンコース 昼食: 当日決定 (路線バス、現地集合解散) ○釣りコース 昼食: 学校 (スクールバス)	・今回は、保護者アンケートと教師の 話し合いでコースを決めた ・部集会で、ほんもの学習のわらいと コースを紹介した ・コース選択のアンケート(1時間) 生徒のアンケート結果をもとに、教員で グループを決定する ・計画(グループ毎に)(3時間) ・直前の確認(1時間) ・休み時間を使って計画するグループ もある ・集合時間、バス時間など調べて決める	・生徒主体で進める ・同世代での関わりがある (介護等体験の学生も 参加する) ・仲間で相談しあ う ・自分で選んだことを体験 する	・他のコースを選んだ人にも、自分たちのコースの 楽しさを共有できるように 報告する (プレゼンテーション) ・次は～をやってみよう →一回にどうつなげるか

(エ) ワークショップで得られたこと

今年度行った3回のワークショップを通して、学習内容の充実改善のための観点を得ることができた。部を超えてワークショップを行ったことで、教員一人一人が小中高の12年間を見据えながら、日々の取組について見つめ直すことができた。しかし、日々の授業実践を充実改善するまでには至っていない。次年度は、3回のワークショップで話し合われたことを生かして、授業実践を行いたいと考えている。

エ. キャリア発達支援における評価のあり方についての検討

昨年度の課題であった「活動中に見られた児童生徒の『行動や言動を含むあらわれ』をどのような方法で見取るのか」について検討するため、7月29日に「キャリア発達支援における評価のあり方」をテーマに本校の研究フォーラムを開催した。研究フォーラムでは、菊地一文氏(青森県教育庁学校教育課指導主事)に來校していただき、本校の昨年度の実践に対する助言と、「キャリア発達支援における評価のあり方」についての講演をしていただいた。

菊地氏からは、以下のことを教えていただいた。

- ・「キャリア発達支援における評価のあり方」を考えていくうえでは、あくまでも「子どもたちのキャリア発達をいかに支援していくのか」ということが目的である。
- ・迷った時には、キャリア教育の定義(中央教育審議会答申※)に立ち返っていただきたい。
- ・キャリア教育の定義で示されているのは、「教科等において、どんな力を育てるのか」というアプローチを前提としている。そのことを通して、「どのような(物事への)向き合い方に変化が見られているのか」ということを見るわけである。



研究フォーラムの様子

- ・いわゆる育てたい力の何を大事にしていくのかということとの関連で、内面の変化を見取っていくことが必要である。

※「キャリア教育」の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」平成23年1月31日)

オ. 各部での授業実践

小学部・中学部・高等部の学部で授業実践を行った。今年度は、領域・教科を合わせた指導で授業実践を行った。詳細については、Ⅱ章で述べる。

②作業学習モデルプランの充実改善(高等部)

作業学習モデルプランとして昨年度取り組んできたプラタナスカフェの取組とクリーン工房の取組を充実改善させてきた。詳細については、Ⅱ章-3で述べる。

③進路指導の充実改善

今年度は、高等部3年間での産業現場等における実習のあり方について検討を行った。そのうえで、昨年度試行した「就労アセスメント実習」の取組について検討を行い実施した。詳細については、Ⅲ章で述べる。

(3) 二年次(平成27年度)の成果と課題

①各取組における成果と課題

二年次の研究を通して、以下のような成果と課題が挙げられた。

【小中高12年間を見通した学習活動の充実改善について】

今年度は、具体的な観点をもとに学習内容の検討を行ったことで、各部の先生方が同じ観点で話し合うことができた。また、話し合いの中で、日々の学習活動を充実改善するための具体的な事柄が挙げられることもあった。しかし、年間指導計画等にはまだ反映されていない。

【キャリア発達支援における評価のあり方について】

昨年度の反省をふまえて、本校として児童生徒の「内面」を把握するための様式(18ページ、〈様式2〉)を作成し、使用することができた。また、研究フォーラムを通して、キャリア教育の定義に沿った評価のあり方を知ることができた。

しかし、各授業実践においては十分に取り入れることができなかった。また、教員の異動がある中で、本校で行われている「内面」の捉え方を職員間で十分に共通理解することができていなかった。

【キャリア発達を促す授業実践・作業学習モデルプランについて】

今年度は、職員研修で得たことを生かして授業実践に取り組むことができた。一方で、ワークショップの手法を取り入れた職員研修等に多くの時間を費やしたために、各部の実践に十分な時間を確保することができなかった。

【進路指導の充実改善について】

今年度は、就労移行支援事業所で行う就労アセスメント実習の仕組みを作ることができた。また、生徒・教員・就労移行支援事業所の支援員の三者が同じ観点で評価を行うことができた。今後は、施設外就労先で行う就労アセスメント実習の仕組みを作るとともに、一回毎の現場実習のねらいや重点項目を明確にする必要がある。

②学校だけで完結しない取組

今年度は、文部科学省委託事業「キャリア教育・就労支援等の充実事業」に関する取組を行ってきたが、この他にも次のような実践を行ってきた。

【ダンスで交流】(文部科学省 平成 27 年度「対話・創作・表現活動を取り入れた人間関係形成能力等の育成に資する教育活動に関する実践研究」)

プロのダンサーで、日本ミュージック・ケア協会認定指導員の加藤善之氏を招聘して、年3回のセッションを行った。2回目のセッションでは、金沢大学附属幼稚園の5歳児と本校の高等部生徒が、ダンスやミュージック・ケアを通して交流した。園児と高等部生徒とは、この日初めて関わったが、音楽の流れる中で身体表現等を通して打ち解けた様子が見られた。園児にとっては、普段触れ合うことのない異年齢の生徒と同じ活動をするよい機会となった。本校高等部の生徒は、園児と関わることで困ったことはなかったと全員が答えていた。また、活動を通して自分の役割を感じることができたよい機会となった。

【金沢市立工業高等学校と小学部との交流】(公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団 平成 27 年度「モビリティ・マネジメント教育にかかわる学校支援」)

金沢市立工業高等学校電気科の生徒が、本校小学部のニーズを受けて、信号機やバスの降車ボタンを製作してくださった。電気科の生徒にとっては、ユーザーのニーズを把握して製品を製作することを学ぶ機会となった。本校小学部の児童にとっては、信号機を見て横断歩道を渡るために必要な知識をわかりやすく学ぶよい機会となった。

【金沢美術工芸大学の学生によるワークショップ】(文化庁 平成 27 年度「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」)

本校の小学部と中学部が、金沢美術工芸大学大学院の学生とワークショップを行った。小学部では、野菜を輪切りにしたスタンプを使って判押しをした。そして、判押しをした紙を木の葉に見立てて、木を描いた紙に飾った。中学部では、大きな布に思い思いの絵の具を塗り重ねて、貫頭衣を仕上げた。金沢美術工芸大学の大学院生にとっては、障害のある子どもたちの美術活動に



幼稚園児との交流



工業高校の生徒との交流



美大生とのワークショップ

ついて理解を深める機会となった。本校の児童生徒は、学生の豊かな発想に触れる機会となり、楽しい雰囲気の中で、準備された様々な素材や色を使って生き生きと表現することができた。

これらの取組は、学校だけで完結しない学習活動である。どの取組も機縁が重なって実現したものであるが、キャリア発達支援の視点による学校研究を行ってきたことで、本校の教員が学校だけで完結しない学習活動について意識していたことも、実現につながった一つの要因であると捉えている。

③まとめ

ア. 「キャリア教育の視点」から今年度の取組を振り返る

本校が学校研究に「キャリア教育の視点」を取り入れて3年が経とうとしている。「キャリア教育の視点」とは、1ページに挙げたように、「(将来の)社会的・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長や発達を促進しようとする見方を持つこと」⁽¹⁾であるとともに、「キャリア概念に基づき、現在行われている教育活動全体の見直しを図り、改善すること」⁽²⁾である。この2つの側面から、今年度の取組について以下にまとめる。

今年度の実践では、教師が「(将来の)社会的・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長や発達を促進しようとする見方を持つ」ことによって、次に挙げる態度や能力を育てることにつながったと思われる。各部の実践を通して児童生徒に育ったと思われる態度や能力は、渡辺(2010)の言葉を借りれば、小学部の実践では、「知らないことに興味・関心を抱き、予測せぬことに恐れを持たず挑戦する態度」⁽⁴⁾、中学部の実践では、「自分の存在自体に自信を持てるようになる」⁽⁴⁾とともに、「他者との関係の中で、社会的期待に応えていけるようになる」⁽⁴⁾こと、高等部の実践では、「各個人が自分自身と向かい合って自分に問いかけ、自分に答える力」⁽⁴⁾であったと言える。

「キャリア概念に基づき、教育活動全体の見直しを図り、改善する」という側面からは、職員研修で学んだことを生かして授業実践に取り組んできた。その結果、遊びの指導、生活単元学習、作業学習において、本校でこれまで大切にしてきたことを踏まえつつ、将来の社会的・職業的自立を念頭に置いて充実改善することができた。

イ. キャリア教育の理念に基づいて、これまで3年間の取組を振り返る

渡辺(2012)は、「キャリア教育は教育改革の理念であり、キャリア教育に特化した特別の活動やイベントを行うことではない。つまり、学校教育をキャリア発達の視点から見直し、各教科を改善することである。したがって、教員の個人的な取組ではなく、学校全体で組織的に取り組むことが理念の実現には不可欠である。」と述べている。ワークショップの手法を採り入れた研修や部を超えた研究会を行ってきたことで、各教師が小中高12年間を見通したうえで、現在関わっている児童生徒にどのような態度や能力を育てたらよいかを考えるようになってきた。それが、各部の授業実践にも少しずつ反映されるようになってきている。

また、研究助言者の木村宣孝氏からは、研究1年目に「教育活動を見直すためには、本校の成果と課題を明確にすることが重要である」ことを教えていただいた。そして、本校の平成24年度までの成果と課題を1ページに挙げたように捉えて取り組んでいる。

ウ. 本校の教育観と児童生徒の「内面」の捉え方について

4 ページで述べたように、本校がこれまでの研究を通して培ってきた教育観は、キャリア発達を支援する際の教育観とは基本的に一致しているものと捉えて、学校研究に取り組んできた。このことを昨年度までは明文化することができなかったが、今年度は現在可能な範囲でまとめることができた。

児童生徒の「内面」の捉え方についても、平成 24 年度までの学校研究で得たものを踏襲しているが、教員の異動がある中で、今年度は職員間で十分に共通理解することができていなかった。また、本校での「内面」の捉え方と、キャリア発達を支援する際に言われる「内面」という言葉との整合性については、十分に検討されているとは言えない。

「キャリア教育の視点」を取り入れた学校研究を継続していくにあたっては、本校の教育観や児童生徒の「内面」の捉え方について、さらに吟味していくことが必要であると思われる。

引用文献

- (1) 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター (2012)「キャリア教育をデザインする『今ある教育活動を生かしたキャリア教育』」
- (2) 菊地一文 (2013)「特別支援学校におけるキャリア教育の推進状況と課題」 「特別支援教育研究」2013 年 9 月号
- (3) 平成 26 年度本校研究フォーラムでの吉川一義氏 (金沢大学人間社会研究域教授) の発言より
- (4) 渡辺三枝子 (2010)「キャリア教育実践上の鍵」 渡辺三枝子・鹿嶋研之助・若松養亮「学校教育とキャリア教育の創造」学文社

参考文献

1. 本校研究紀要 平成 24 年度、平成 26 年度
2. 吉川一義 (2011) 平成 22 年度本校教育研究会 シンポジウムにおける発表資料
3. 吉川一義 (2014) 平成 26 年度本校研究フォーラム パネルディスカッションにおける発表資料
4. 中央教育審議会 (2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」
5. 文部科学省 (2011)「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育の手引き」
6. 木村宣孝 (2013)「特別支援学校知的障がい教育校におけるキャリア発達の支援について」第 48 回全国特別支援学校知的障害教育教頭研究大会北海道大会 特別講演記録
7. 名古屋恒彦 (2015a)「子ども主体の生活を実現する領域・教科を合わせた指導」本校職員研修資料
8. 名古屋恒彦 (2015b)「遊びの指導、生活単元学習は作業学習にどのようにつながっていくか～各ライフステージを子ども主体に積み重ねる～」いしかわ生活単元学習を学ぶ会 平成 27 年度第 3 回学習会 講義資料
9. 渡辺三枝子 (2012)「キャリア教育の理念と今後の課題」 「季刊 特別支援教育 No.46」東洋館出版社